

中期蒙古語の音節末[-l]の音訳漢字

中村雅之

1. 小沢氏の理解

小沢重男『元朝秘史』(岩波新書1994:206頁)は音節末の[-l]音について、元朝秘史の漢字音訳では一貫して小字の「勒」で表わすが、華夷訳語(甲種)では以下のように3種類の方式を用いると述べている。

	(秘史)	(華夷訳語)
molsun	沫勒孫	莫勒孫
altan	阿勒壇	丁安壇
elčin	額勒臣	額里臣

すなわち、秘史が「勒」のみであるのに対して、華夷訳語では「-勒」「丁(-n)」「里」の3種を用いるという。このような理解は大筋においては正しいと言えるが、詳細に見ると様相はもう少し複雑なようである。

2. 「魯」の使用

小沢氏が挙げた3種のうち、「里」は前後に[i]あるいは女性母音がある時に用いられることが多い。そのため小沢氏はこの「里」は口蓋化した[-l]を表わしたものと考えている。おそらく華夷訳語のような精密な表記体系にあって、ことさらに「里」を用いるからには相当の理由があるはずだということからそのような結論に至ったものであろう。しかし以下に見る「魯」などの例と照らし合わせると「里」は『至元訳語』以来の伝統的な(=さほど精密でない)表記法の残存に過ぎないのである。

華夷訳語および元朝秘史においては、前後に[i]がある場合に「里」を用いたように、前後に円唇母音がある場合に[-l]を「魯」で表わすことがある。

(傍訳)	(蒙古文語)	(華夷訳語音訳)	(秘史音訳)
做了	bolba	孛魯巴	孛魯罷/孛勒罷
遇着	jolyaju	勺魯哈周	勺魯 ^中 合周/勺勒 ^中 合-
頭盔	duyulya	都兀魯 ^中 合	(例なし)

「里」と「魯」の例から、漢字音訳においては音節末の[-l]を前後の環境に応じた母音を付加して表現する方式があったことがわかる。対訳語彙集として最も古い『至元訳語』においても、「頭盔」に対して「独魯花」が与えられており、伝統的な表記法と言える。通常の漢字表記では音節末の[-l]音を厳密に再現することができないため、前後の母音と似た音を付加して「里」や「魯」を用いたのである。ほかにも[al]を「安」で記すなど近似音を用いる方法も伝統的なものであり、華夷訳語の「丁安」という表記はそれを精密化したものと言える。「丁安」の表記をもって、この場合の[-l]が鼻音化していたなどと結論付けるのが無謀であるように、「里」のみによって[-l]が口蓋化していたと仮定するのもやや性急な結論であろう。

なお、秘史における「魯」の使用はほぼ巻1・2に限られている。秘史の巻1・2と巻3以降とが種々の用字法において性質を異にすることはよく知られているが、「魯」の使用においても同様である。

3. 「刺」の使用

至元訳語においては、「里」「魯」に加えて、前後に男性母音/a/がある時に「刺」が用いられる。

傍牌: qalqa「匣刺罕」(華夷訳語では「^中合勒^中合」)

門子: qayalya「匣刺瞎」(華夷訳語では「哈^丁安^中合」)

すなわち、至元訳語・華夷訳語・元朝秘史においては、音節末の[-l]を表わす「刺」「里」「魯」の分布は以下のようになる。

	「刺」	「里」	「魯」
至元訳語	○	○	○
華夷訳語	×	○	○
元朝秘史	×	×	△(巻1・2のみ)

ここで、元朝秘史の巻1・2における「魯」の使用は、必ずしも巻1・2において小字の「勒」が用いられないことを意味していない。小字の「勒」が全巻を通じて用いられるのに対して、「魯」の使用は巻1・2に限られるということである。

4. 「温勒」etc.

小沢(1994:220頁)は、使役の接辞「-’ul(文語-yul /-gul)」に対する音訳が元朝秘史の巻1・2においては「温勒」、巻3以降は「兀勒」と截然と分かれることを指摘し、さらに巻1・2において「温勒」がもともと「^丁温」であったことは疑いないとする。華夷訳語と元朝秘史巻1・2に多くの共通点があるため、音節末の[-l]に対する音訳方式も同じであったはずだという考えであろうか。しかしもともと「^丁温」という表記を用いていたことが「疑いない」と言い切るほど確実かどうかは吟味の余地があるところである。

「温勒」のように音節末に[-n]を有する漢字に小字の「勒」を付す形式は、華夷訳語にもいくつか見られる。(牽: 可団勒 kotel-/kotel-, 光: 格^平連勒 gerel) 一方、音節末に[-n]をもたない開音節の漢字の左肩に小字「^丁」を付す形式も珍しくない。(達達: 忙^丁豁 monyol, 繫: ^丁迭 del)

すなわち、華夷訳語においては小字「^丁」と「勒」を用いる分布はおおよそ次のようになる。

	「 ^丁 」	「勒」
開音節の漢字	△	○
[-n]の漢字	○	△

このような分布を考慮に入れる時、元朝秘史巻1・2において「温勒」が用いられることは何ら怪しむに足りないことに気付く。確かに巻3以降の「兀勒」の表記と比較すると「温勒」は伝統的な方式を意識した表記ではあるが、必ずしも「^丁温」を前提にしなければありえないような表記ではない。

なお、元朝秘史の巻3以降にも、「温勒」タイプの表記が存在することを付言しておく。(年: 真勒 jil、淨: 阿^平隣勒 aril-など)

5. まとめ

至元訳語においては、音節末[-l]の音訳には開音節の漢字の後に「兒」を記したり、[-n]の字で代用したり、「刺」「里」「魯」を用いたりした。それぞれが華夷訳語・元朝秘史でどのように変わったかを示したのが以下の表である。(波線は使用頻度の低いもの)

至元訳語	(開音節 +)兒	-n	刺 / 里 / 魯
華夷訳語	()勒/ <u>丁</u> ()	<u>丁</u> (-n)/(-n)勒	()勒 / 里 / 魯
元朝秘史	()勒	()勒/ <u>丁</u> 勒	()勒 / ()勒 / 魯

「里」「魯」や「丁(-n)」(<「-n」)が伝統的な表記法の残存であることは一目瞭然であろう。